佳作

美味しいって一言

東京都　お茶の水女子大学附属中学校二年　西村　七夏

私は夏の夜、冷房が効いた部屋で布団に潜って考え事をするのが好きだ。ある日、いつものように布団に潜って今日の夕食の様子を思い出していた。

我が家の夕食は母に「ご飯できたからお皿運んで」と言われて始まる。皆「はーい」と返事するものの一度言われたぐらいじゃ誰もテレビの前から動かない。母に何度も言われてやっとノロノロ動きはじめるのが常だ。でも今日はこの後がさらにひどかった。夕食を見たとき、弟は「おいしくなさそ」。妹は「私これ嫌い」と言った。そして私は無言でしかめっ面だった記憶がある。考えてみると皆態度が最悪すぎる…。その時母はどんな気持ちだっただろう。思い出すごとに、こんなことをした自分に苛立ったし、母に対して申し訳ないと思った。けれど夜も遅かったのでその日はそのまま眠ってしまった。

しばらくしてこないだ考えていたことを忘れかけていたある日、私は不意に家庭科で習ったハンバーグを作ろうと思った。母に作ってもよいか聞くと、

「え、いいの？助かるー。」

と喜んでくれたので追加でスープとサラダも作った。夕食の時間になって私は、

「ご飯できたから食べよ。」

と声をかけ、料理を運び家族全員席につかせた。私が作るのが新鮮だからか二人とも素直に座ってくれた。

「いただきます。」

最初は妹も弟も普通に食べていたが、途中から箸の進みが遅くなった。すると弟が「もういらない」と残してしまった。立て続けに妹も「やっぱ私ももういい」と席を立ってしまった。正直せっかく作ったのに残すなんて失礼だと腹をたてる自分がいた。そんな中、母だけはペロリと完食し、

「美味しかった、やればできるじゃん。」

と言ってくれた。

私は、食器を流しに運びながら母に申し訳ないと感じた出来事を思い出していた。ご飯を作ったことで少し母の気持ちが分かる気がした。張り切って、一生懸命作った夕食を、もういらない、おいしくないと残されるのは悲しいし、もうそんな人には作りたくないと思った。母だって自分が作ったものに対して嫌そうな態度を取られたらいい気分にはならないだろう。私や兄弟はそんなような態度を取ってしまうことがあるのに…毎日毎日ご飯を作ってくれる母。改めて私は、母には感謝してもしきれないと思った。料理に限ったことではない。食器洗い一つとったって自分たちも使った物なのだから母が洗うのが当たり前という考え方はおかしい。

「今日はエビマヨだよ、早く食べよ。」

私は声をかける。最近は夏休み中というのもあり、よく自分で料理を作ったり、家事を手伝ったりするようにしている。私もこれからは母の日頃からの感謝を行動で返していきたい。

私は今、布団に潜りこんで明日は妹と弟が好きなカレーを作ろうか、母が好きなシチューを作ろうか悩んでいる。最近知ったことは「美味しい」と言いながら笑顔で食べることで皆が幸せな気持ちになることだ。